第7回麻雀最強戦

決勝戦優勝

山崎氏が2位に64.7P差と大トップでむかえた決勝戦。飯田氏がどとうの追いあげで山崎氏からハネ満を直撃する大逆転劇を見せた。

飯田正人 188.3P

2位 山崎一夫 151.2P

3位 藤田敏八 136.3P

4位 植島啓司 112.2P

決勝戦全詳細!!

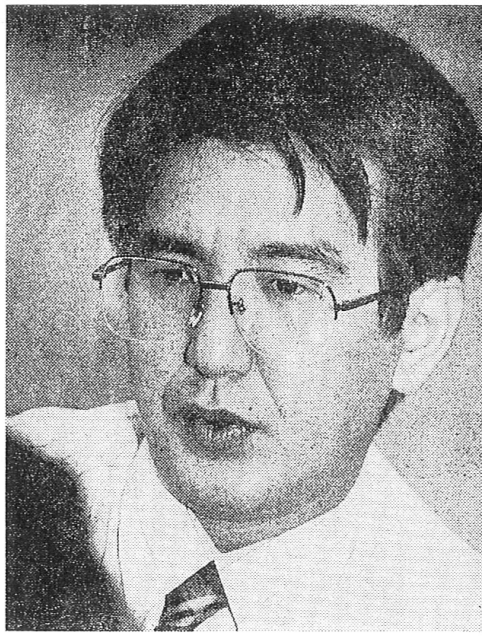
予選順位

1位	山崎一夫	203.7P
2位	植島啓司	139.0P
3位	飯田正人	123.8P
4位	藤田敏八	121.5P
5位	古久根英孝	121.0P
6位	荒　正義	91.1P
7位	田中英知	50.4P
8位	多田和博	
9位	馬場裕一	
10位	中村晃子	
11位	小財和幸	
12位	どい　誠	
13位	中野浩一	
14位	土井泰昭	
15位	原　律子	
16位	坂上　忍	

最強戦・自戦記スペシャルPart3

土井泰昭 (14位)

「この次は、その無念を晴らそう…」



最高位戦所属。プロ大会準優勝。『勝負師の条件』『ナルミ』『幻に賭けろ』など、麻雀劇画の原作を多数手掛ける。本誌では『土井泰昭の最終定理』を連載するなど、卓越した麻雀理論には定評がある。

まずは、期待してくださった読者の皆さまに深くお詫び申し上げます。14位という惨めな結果について、申し訳ありませんでした。

× × ×

初めて『ホテル・グランドパレス』で麻雀を観戦したのは今から15年前の王位戦のときである。麻雀ライターとしてデビューしたばかりで観戦記という大役を任され、それこそいつになく緊張し、卓上の一摸一打を追っていた。と同時に、いつかはこんな場面で打ちたいという思いを馳せたものである。

以来、『ホテル・グランドパレス』では数々のタイトル戦を観戦記者の立場で味あわせてもらった。『ホテル・グランドパレス』は私にとって麻雀タイトル戦の聖地なのである。最強戦が当初、『ホテル・エドモンド』で催されたときは残念でならなかった。

そして、この度、10数年来の願いがかなって、『ホテル・グランドパレス』で打てることになった。(正確には一度、新年会兼新年麻雀大会を打ったことがあるが、それは勘定にはあてはまらない)

当日は対局者の間では一番乗りで会場に着いた。当日に思っていられる性格ではないので、「ドキドキするな」などと皆にはおどけてみせていた。もちろんポーズだが、落ちつかないフリをしなければならないほど、落ちついてなかったようだ。

10数年以上も卓の傍らから観戦してきた私にしてみれば、卓に座って周囲を見るのは、いきなり北半球から南半球に来たようなもので、戸惑いを感じずにはいられなかった。

『ホテル・グランドパレス』で打つことへの思いが強すぎ、いざ卓に着いてみると、その情景が長年親しんだものとは全く逆になったことで、自分を見失ってしまったのだろうか。

いっそ、等身大の土井人形でも作って、ギャラリーの間に据えておけば安心できたかも知れない。

今回の最強戦では、私に残ったものはひとつしかなかった。成績やこの一打などではなく、「悔い」だけである。待ち望んでいたこの日、この機会に、自分の打ち筋を通したわけでもなく、ばかりか、この日まで培ってきた持論、戦法など、それらすべてのものから何ひとつ発揮できなかった。まさに「何のためにの」である。

私は最高位戦に所属しているが、その最高位決定戦に出ることよりも『ホテル・グランドパレス』で打つことに憧れていた。だからこそ、いままでの私の麻雀の集大成を発揮すべき場なのだったが……自分で自分の持つ重圧に押しつぶされたか。

いま強く思うことは、「その日をリセットできたら」という思いである。その日打っていた私は私ではないのだから。

だが、そんなことは現実では不可。時間は戻ることなく、酷にも淡々と過ぎてゆく。そして、また最強戦の季節が来る。そうだ、時間は酷ではない。再び私にチャンスを与えてくれているじゃないか。

どうしようもない虚脱感の中にあっても、次のことを意識しなければならない。この次、『ホテル・グランドパレス』で打つときは、自分の麻雀をしっかり打つこと。つまり、「憧れ」から「責任」へと自分の立場が変わったことに気づかねばならない。

とにかく、『ホテル・グランドパレス』で打つという夢だけはかなったのだ。「無限の悔い」を残して……。

この次はその無念を晴らそう。